

2021年に埼玉県立川の博物館敷地内で観察されたカジカガエルの記録

藤田 宏之（川の博物館）

はじめに

カジカガエル *Buergeria buergeri* は無尾目アオガエル科カジカガエル属に分類され、本州、四国、九州、兵庫県淡路島、長崎県福江島に生息している。古くから美しい鳴き声で知られ、河鹿として詩歌に登場した（松井・前田, 2018）。近年は河川改修による河道の直線化やコンクリート護岸による繁殖地の環境悪化、河畔林の伐採等の生息地の環境悪化などにより個体数を減らしている。繁殖期は5月～7月頃で降水量が多くなる梅雨時と重なるが、大雨による河川増水で卵塊、幼生が流されることがあり、気候による影響を受けやすい種である。埼玉県レッドデータブック2018では準絶滅危惧種に指定され減少傾向にある（埼玉県, 2018）。本県における近年の減少傾向は歯止めがかからないと考えられる。

埼玉県立川の博物館（以下当館）は一級河川荒川本流右岸の河川敷に立地し、下流側には河畔林、南側には斜面林が存在している。荒川ではカジカガエルの繁殖が確認され、当館敷地内でも生息が確認されている（藤田・石井, 2010）。カジカガエルのオスは繁殖期の河川敷では特徴的な美しい鳴き声から容易に確認できるが、当館敷地内でも繁殖期には荒川から鳴き声を確認することができる。しかし繁殖場所以外では確認事例が少なく、繁殖行動といえない生態に関する知見は稀である。カジカガエルの生態に関する詳細な記録としては、総合学習としてカジカガエルの生態を25年にわたって調査した島根県出雲市の市立鱒淵小学校猪目分校（現在分校は廃校）による取り組みが挙げられる。学術的な研究とはいえないが、長期間にわたる定点的な生態調査であり大変貴重な事例といえる（平田市立鱒淵小学校猪目分校, 1998・2000・2004 出雲市立鱒淵小学校猪目分校, 2006・2010）。2021年に当館敷地内ではカジカガエルの繁殖行動といえない行動が複数回確認され、その記録を本稿で記した。

カジカガエルの記録

本稿は2021年に当館敷地内で確認されたカジカガエルとし、公有地の河川敷や公道上で確認された記録は除外した。敷地内のカジカガエルの確認地点は図1、2で示した。また、日付、ステージ、性別、地点、確認時の詳細は表1で示した。



寄居町都市計画基本図 1/2,500 を改編

図1 カジカガエル確認地点



図2 カジカガエル確認地点（本館付近拡大図）

1. 本館南側職員自転車置き場付近（A地点）

A地点は6月30日にメス成体の確認を始めに最多の7回（8個体）確認された。本館建物南側で自転車置き場となっている。建物は大きな窓ガラスがあり、夜間は非常灯の点灯

表1 埼玉県立川の博物館敷地内でのカジカガエルの確認記録 (2021年)

日付	ステージ	性別	地点(図1)	特記事項
2021.6.30	成体	♀	A	高さ2.1mガラス大窓の枠に横方向.
2021.7.7	成体	♂	A	高さ2.9mガラス大窓の枠に縦方向に移動中(頭を下).
2021.7.22	成体	♀	B	開館時雨水の雨樋で確認.
2021.8.2	成体	♀	A	高さ2.1mガラス大窓の枠に横方向.
2021.8.2	成体	♀	A	高さ0.9mホースの上.
2021.8.3	成体	♀	A	白昼高さ1.2m壁の隅に縦方向(頭を上).ニホンヤモリも確認.
2021.8.10	成体	♀	A	高さ2.1mガラス大窓の枠に横方向.
2021.9.18	幼体	不明	C	車椅子リフト併設の階段で確認.
2021.9.19	成体	♀	A	高さ2.6mガラス大窓の枠に縦方向(頭を上).アズマヒキガエルも確認.
2021.9.24	成体	♀	D	白昼職員駐車場にある倉庫前で確認.
2021.10.6	成体	♀	A	高さ2.8mの排気口の窓枠.アズマヒキガエルも確認.

により周囲より明るい。また、自転車が置けるよう壁がくぼんでいるが、壁際に清掃用具や日よけのヨシズ、水道用ホースが置かれている。付近の外灯だけでなく、大窓から照らされる室内の非常灯がライトトラップのような働きになり、昆虫類が多く飛来する。

2. 本館正面入口雨樋 (B地点)

B地点は本館の正面入口付近の雨樋である。開館中は人の出入りがある場所で、7月22日朝の開館時にメス成体が1度確認された。

3. 本館第一展示室 (C地点)

C地点は本館第一展示室内で、当館のメインの展示室である。東側の車椅子リフトが併設されている階段付近で9月18日に性別不明の幼体が1度確認された。

4. 職員駐車場 (D地点)

D地点は本館より公道を隔てた南東側にある職員駐車場で、斜面林や墓地に隣接している。9月24日白昼にメス成体が1度確認されたが、本館方向から日影になっている斜面林方向へ移動中であった。

考察

A地点は最も多くの7回カジカガエルが確認された。A地点は日没後明るい非常灯に多くの昆虫類が飛来し、カジカガエルの餌資源と考えられる鱗翅目(チョウ・ガ)、毛翅目(トビケラ)、楯翅目(カワゲラ)、蜻蛉目(カゲロウ)の成虫は特に多い印象であった。これら昆虫類を目的に餌場としてA地点を利用している可能性がある。大きなガラス窓に行く手を阻まれた昆虫類は窓枠に落下することが

あり、それらが窓の棧に待機するカジカガエルの目の前で落下すれば容易に餌にありつくことができる。トビケラなど水生昆虫類はカジカガエルと類似した河川環境で繁殖し、荒川でも個体数が多いことから、カジカガエルの餌資源としての依存度は高いと考えられる。

また、A地点ではカジカガエルと同じくしてアズマヒキガエルも2回確認した。アズマヒキガエルは垂直の壁を登れないため、地面に飛来ないしは落ちた昆虫類を狙っていたと考えられる。対してカジカガエルは高さ2mあまりの窓枠で待機していたため、お互い競合せず上手に空間を分け合っていたといえる。

カジカガエルが確認された本館付近から、繁殖地になっている荒川右岸河川敷からの距離は2~300m程度である。A地点では1個体をのぞいて7個体メスであったことから、産卵を終えた個体が繁殖場所から近い距離で容易に採餌できる場所として繰り返して利用していた可能性がある。捕獲して体サイズや体重の計測はおこなっていないが、ほとんどの個体が十分に餌を食べていたのか栄養状態がよい個体であった。

斜面林、河畔林は自然環境といえるが、当館敷地内は人工的な環境である。カジカガエルが人工的な環境を上手に利用していた例も挙げる。A地点は非常灯によって餌資源となる昆虫類の飛来が多いと前述したが、カジカガエルにとって都合がよい点も他にもある。A地点に備えられている人工物のヨシズやホースの陰は昼間の隠れ家には都合がよいと考えられる。周囲は開放的で昼間は人や車両

の往来もあるため、天敵は近寄りにくい。また、凹凸のあるレンガ状の壁は滑りにくく、垂直登坂ができるカジカガエルには往来が可能であり、さらに天敵は近寄り難い。福山(1996)は木の上よりもむしろ崖に張りついている個体を見かけることの方が多いと述べているが、本館の壁は崖と類似している。その壁に地面と垂直に張りついてじっとしていたのを2回確認している。

B～D地点の事例は各1回のみだったが、B地点は雨樋を隠れ家に利用していたと考えられる。C地点は2021年を通して感染症対策の換気のため本館の窓や扉を開放することが多かったが、荒川で繁殖した上陸直後の個体が偶然迷い込んだと考えられる。カジカガエルは平行移動だけでなく、登坂能力が高く、わずかな隙間に入り込むため、窓や扉の隙間も通過してしまう可能性がある。繁殖地に隣接した当館であるゆえに発生した事例であろう。

当館敷地も含まれる荒川右岸側は当館敷地東側の河畔林、南側の斜面林と非繁殖期の生息地となり、当館敷地周辺はカジカガエルのすべてのステージが確認されていることから、生活圏が成り立っていると考えられる。D地点で確認されたメス成体は、本館から南方面へ斜面林に向けて移動していたと考えられ、斜面林は非繁殖期の生息地や越冬場所になっている可能性がある。斜面林は河岸段丘の段丘面上にあり、河川増水時でも浸水の可能性は低く、たびたび浸水する河畔林に比べて安定した環境といえる。また、福山(1996)によるとふだんは川沿いの森や崖などで小昆虫類を食べてくらししていると述べているが、当館の敷地、斜面林、河畔林は福山(1996)の記述に近い環境といえる。しかし対岸の荒川左岸側は、流速が早く水深も深く広い河原もなくカジカガエルの繁殖には不適である。しかも住宅地や商業地に囲まれ緑地も少なく、主要幹線の国道140号線バイパスなど開発が進んでいるため、カジカガエルの定着は難しいと考えられる。

2021年は特殊な事情があったことも触れなければならないだろう。感染症流行により当館に隣接する町営の荒川河原キャンプ場の休

場が長く、2020年に引き続きカジカガエルの繁殖期は休場されていた。2シーズンにおよぶ河原利用者の大幅減により、カジカガエル幼生への採集圧が大幅に減少したと考えられる。キャンプ場にはタモ網を持った家族連れの利用者を目にすることがあるが、キャンプ場がにぎわうシーズンはカジカガエルの繁殖期と重なる。おもに浅瀬を生息場所とするカジカガエル幼生は容易に捕獲することができるため、キャンプ場周辺は恒常的に高い採集圧となっていたと考えられる。ほとんどの利用者は「ただのおタマジャクシ」として認識し、河川環境を繁殖場所としている特異なカエルであるカジカガエルの幼生であることは認識していないと推測され、安易に持ち帰られることも多かったと考えられる。2021年にカジカガエルの確認事例が相次いだ理由として、2シーズン続いた採集圧の低下により生き残った個体が増加した可能性がある。

さいごに、当館敷地周辺はカジカガエルの適した環境が局所的ながらも存在し、減少傾向にある中、常時ヒトの目が届く貴重な生息地といえる。また、当館の職員等による生息情報を手がかりに、継続的な生態調査も不可能ではない。今後も生態的な情報の記録を取り続けるとともに、大幅な環境悪化や過度な採集圧がないことを願うばかりである。また、当館は「カジカガエルの鳴き声が聞こえる博物館」として啓発し、保全に努めて参りたい。

謝 辞

カジカガエルの生息情報などに協力いただいた当館職員一同に謝意を表す。特に笠原浩氏には詳細な情報をいただき、厚く御礼を申し上げます。

引用文献

- 藤田宏之・石井克彦(2010)埼玉県立川の博物館周辺の両生類相。埼玉県立川の博物館紀要10:1-4。
- 福山欣司(1996)カジカガエル。日本動物大百科5 両生類・爬虫類・軟骨魚類。pp49。平凡社、東京。
- 平田市立鱒淵小学校猪目分校(1998)カジカガエルと猪目分校の子どもたち。平田市立

鰐淵小学校猪目分校。
同上（2000）カジカガエルと猪目分校の子どもたちⅡ。平田市立鰐淵小学校猪目分校。
同上（2004）カジカガエルと猪目分校の子どもたちⅢ。平田市立鰐淵小学校猪目分校。
出雲市立鰐淵小学校猪目分校（2006）カジカガエルと猪目分校の子どもたちⅣ。出雲市立鰐淵小学校猪目分校。
同上（2010）カジカガエルと猪目分校の子どもたちⅤ。出雲市立鰐淵小学校猪目分校。

松井正文・前田憲男（2018）カジカガエル。日本産カエル大鑑。pp180-183。文一総合出版、東京。
埼玉県（2018）埼玉県レッドデータブック動物編2018。埼玉県環境部みどり自然課。



図3 本館南側職員自転車置き場付近（A地点）



図6 ガラス窓枠のカジカガエル成体（A地点，2021.8.2）



図4 A地点左側に備えつけられている清掃用具とホース

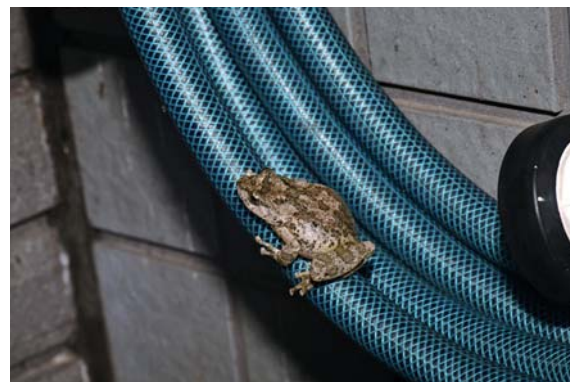


図7 ホース上のカジカガエル成体（A地点，2021.8.2）



図5 A地点右側の排気口



図8 排気口の窓枠のカジカガエル成体（A地点，2021.10.6）